

7/8 Tue.

第650回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.650 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor Laureate

ピアノ
Piano

第1コンサートマスター
First Concertmaster

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

細川俊夫
HOSOKAWA

[休憩]
[Intermission]

ツェンダー
ZENDER

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者) -p.5
SYLVAIN CAMBRELING

北村朋幹 -p.7
TOMOKI KITAMURA

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

付随音楽〈真夏の夜の夢〉序曲 [約12分] -p.10
"A Midsummer Night's Dream" Overture

月夜の蓮 —モーツァルトへのオマージュ—
[約22分] -p.11
Lotus under the Moonlight – homage à Mozart –

シューマン・ファンタジー (日本初演) [約43分] -p.12
Schumann-Phantasie (Japan Premiere)
I. 前奏曲
II. 廃墟
III. 間奏曲 I
IV. 凱旋門
V. 間奏曲 II
VI. 星の夜

7/13 Sun.

第143回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 143 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

7/15 Tue.

第684回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.684 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor Laureate

ピアノ
Piano

第1コンサートマスター
First Concertmaster

バーンスタイン
BERNSTEIN

ガーシュイン
GERSHWIN

[休憩]
[Intermission]

バルトーク
BARTOK

ムソルグスキー (ラヴェル編)
MUSSORGSKY (arr. RAVEL)

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者) -p.5
SYLVAIN CAMBRELING

リーズ・ドゥ・ラ・サール -p.7
LISE DE LA SALLE

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

〈キャンディード〉序曲 [約5分] -p.15
"Candide" Overture

ピアノ協奏曲 ヘ調 [約31分] -p.16
Piano Concerto in F
I. Allegro
II. Adagio – Andante con moto
III. Allegro agitato

ルーマニア民俗舞曲 (弦楽合奏版) [約6分] -p.17
Romanian Folk Dances (for String Orchestra)
I. 棒踊り
II. 帯踊り
III. 踏み踊り
IV. 角笛踊り
V. ルーマニア風ボルカ
VI. 速い踊り

組曲〈展覧会の絵〉 [約35分] -p.18
Pictures at an Exhibition
プロムナードー I. グノームス (こびと) – プロムナード
II. 古城 – プロムナード
III. テュイルリー (遊びの後の子供たちの喧嘩)
IV. ビドロ (牛車) – プロムナード
V. 殻をつけた雛鳥のバレエ
VI. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ (金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人)
VII. リモージュ (市場)
VIII. カタコンブ (古代ローマの地下墓地) – 死せる言葉による死者への呼びかけ
IX. 鶏の足の上の小屋 (バーバ・ヤガー＝民話上の妖婆)
X. キエフ (キーウ) の大門

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会
協賛：大成建設株式会社 (7/15)
協力：横浜みなとみらいホール (7/13)
※7/15公演では日本テレビの収録が行われます。

7/19 Sat.

第279回 土曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 279 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

7/20 Sun.

第279回 日曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 279 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

指揮
Conductor

オーボエ
Oboe

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

ド布林カ・タバコヴァ
DOBRINKA TABAKOVA

モーツァルト
MOZART

[休憩]
[Intermission]

リムスキー＝コルサコフ
RIMSKY-KORSAKOV

デリヤナ・ラザロヴァ -p.6
DELYANA LAZAROVA

アルブレヒト・マイヤー -p.8
ALBRECHT MAYER

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

オルフェウスの彗星 (日本初演) [約5分] -p.20
Orpheus' Comet (Japan Premiere)

オーボエ協奏曲 ヘ長調 K. 293
(G. オダーマット補筆版) (日本初演) [約26分] -p.21
Oboe Concerto in F major K. 293
(completed by G. Odermatt) (Japan Premiere)
I. Allegro
II. Adagio non troppo
III. Rondo: Allegro

交響組曲〈シェエラザード〉作品35 [約42分] -p.22
Scheherazade, op. 35
I. 海とシンドバッドの船
II. カランダール王子の物語
III. 若い王子と王女
IV. バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破、終曲

指揮

シルヴァン・カンブルラン
(桂冠指揮者)

SYLVAIN CAMBRELING,
Conductor Laureate

衝撃的！
古典と現代を繋ぐ
幻想的なひと時



©読響

鬼才カンブルランが〈シューマン・ファンタジー〉や細川作品、〈展覧会の絵〉などを指揮し、古典と現代を繋ぐような独創的なプログラムを披露。カラフルかつ斬新な響きで、幻想的なひと時へと導く。

1948年、フランス・アミアン生まれ。2010年から9年間、読響常任指揮者を務め、17年11月にはメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉でサントリー音楽賞を受賞した。19年4月に桂冠指揮者に就任。22年12月に一柳慧の新作やヴァレーズ〈アルカナ〉などを指揮した公演が文化庁芸術祭大賞を受賞した。

バーデンバーデン&フライブルクSWR響の首席指揮者、ベルギー王立モネ歌劇場、フランクフルト歌劇場、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督などを歴任。クラシック音楽界の既存の概念にとらわれず、常に柔軟かつ斬新な発想で数多くのプロジェクトを成功へと導いた。現在はハンブルク響の首席指揮者、クラングフォルム・ウィーンの名誉首席客演指揮者、ドイツ・マインツのヨハネス・ゲーテンベルク大学指揮科の名誉教授を務めている。これまでにウィーン・フィル、ベルリン・フィル、パリ管、ロサンゼルス・フィル、サンフランシスコ響、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、ミュンヘン・フィル、フィルハーモニア管、ウィーン響など一流楽団に客演。オペラでは、メトロポリタン歌劇場、パリ・オペラ座、ザルツブルク音楽祭などに出演。録音も数多く、SWR響との《メシアン／管弦楽作品全集》は、一人の指揮者と同一の楽団による世界初の全集として、欧州の主要な音楽賞を総なめにした。読響と共演したメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、マーラーの交響曲第9番のCDも好評を博している。

7/8
定期

7/13
横浜マチネー

7/15
名曲

Maestro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

7/19

土曜マチネー

7/20

日曜マチネー

Maestro

指揮

デリヤナ・ラザロヴァ

DELYANA LAZAROVA, Conductor

ラザロヴァが紡ぐ
魅惑の音絵巻
〈シェエラザード〉

©Marco Borggreve

古典派から現代作品まで幅広いレパートリーで、国際的に活躍する新鋭。初来日の今回、〈シェエラザード〉で豪華絢爛かつ劇的なクライマックスを演出する。

ブルガリア生まれ。米国インディアナ大学ジェイコブズ音楽院でヴァイオリンをM. フックスに学び、チューリヒ芸術大学でシュレーフリに指揮を学んだ。ハイティンク、P. ヤルヴィ、スラットキンらのマスタークラスを受講。2020年にアスペン音楽祭でコンロン指揮者賞を受賞。同年にシーメンス・ハレ国際コンクールで優勝し、ハレ管で副指揮者およびハレ・ユース管の音楽監督を務めた。ケルン放送(WDR) 響とフランス国立管でマチュラルの副指揮者も務めた。

25年9月にBBCスコティッシュ響とユタ響、両楽団の首席客演指揮者に就任する。これまでにベルリン・ドイツ響、バーミンガム市響、フランクフルト放送響、ミネソタ管、ハノーファー北ドイツ放送NDRフィル、フィルハーモニア管、BBC響、バーゼル響、マルメ響、ローザンヌ室内管、クラングフォルム・ウィーンなど多くの楽団に客演している。24年秋にはエネスコ・フェスティバルに出演。エネスコ国際コンクールの開幕演奏会を指揮し、好評を博した。

特に東欧やロシアの音楽と、スイスで学んだ近現代の音楽に情熱を注いでおり、24年から現代音楽に特化するヒューストンのROCO (リバーオークス室内管) のアーティストック・パートナーを務め、クラリス・アサドのピアノ協奏曲〈日食〉初演など、多くの現代音楽を取り上げている。23年にはブルガリア出身の作曲家タバコヴァの作品を収録したCDをリリースした。読響初登場。



©TAKA MAYUMI

ピアノ

北村朋幹

TOMOKI KITAMURA, Piano

フランス・シェルブール生まれ。4歳でピアノを始め、パリ国立高等音楽院で学ぶ。13歳でコンチェルト・デビュー。欧州各地のコンクールで優秀な成績を収め、2004年にはニューヨークのヤング・コンサート・アーティスト国際オーディションで優勝、同年に初の日本ツアーを行なって成功を収めた。これまでにブロムシュテット、ルイーゼ、マゼール、ヤノフスキ、バッパーノらの指揮で、ドレスデン国立歌劇場管、ベルリン放送響、ミュンヘン・フィル、シカゴ響、ケルン放送(WDR) 響、ウィーン響、パリ室内管、チューリヒ・トーンハレ管、フィルハーモニア管、ボストン響、ロサンゼルス・フィルなどと共演。フランスのナイーヴから、ショパン、シューマン、ラヴェルなどを演奏したCDを出している。読響とは15年以来、2度目の共演。

哲学的英知を備えた唯一無二の芸術家。浜松国際コンクール第3位、リーズ国際コンクール第5位、ボン・テレコム・ベートーヴェン国際コンクール第2位、東京音楽コンクール優勝。日本と欧州各地でソリストとして著名楽団と共演するほか、リサイタルや室内楽で幅広く活躍する。近現代作品の演奏への評価も高く、2022年「北村朋幹 20世紀のピアノ作品 (ケージと20世紀の邦人ピアノ作品)」で佐治敬三賞を受賞。24年にはアルディッティ弦楽四重奏団と細川俊夫、イルダ・パレデスのピアノ五重奏曲を世界初演し、成功を収めた。録音はソロアルバムをフォンテックよりリリースしており、「リスト 巡礼の年 全3年」などの成果により、25年に令和6年度芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。ベルリン在住。読響とは10年から共演を重ねている。



©Stephane Gallois

ピアノ

リーズ・ドゥ・ラ・サール

LISE DE LA SALLE, Piano

7/8

定期

Artist

7/13

横浜マチネー

7/15

名曲

Artist

7/19

土曜マチネー

7/20

日曜マチネー

Artist



©Matt Dine

オーボエ

アルブレヒト・マイヤー

ALBRECHT MAYER, Oboe

ドイツ・バイエルン州生まれ。オーボエをショイヤー、メールヴァイン、ブルグ、ゴリツキらに師事。1990年からバンベルク響の首席奏者、その後92年からベルリン・フィルの首席奏者を務めている。ソリストとしてアバド、ラトル、アーノンクールらと共演。今年9月にはルツェルン音楽祭などでペトレンコ指揮のベルリン・フィルとの公演で、B.A. ツィンマーマンの協奏曲のソロを務める。室内楽活動では、ピアノのアンスネスやグリモー、バス・バリトン歌手のクヴァストホフらと共演している。また指揮者としてデュッセルドルフ響、ハレ歌劇場管、ニュルンベルク響、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン祝祭管などを振っている。ドイツレコードアカデミーのエコー・クラシック賞を3度、バイエルン文化賞などを受賞。読響初登場。

メンデルスゾーン 付随音楽〈真夏の夜の夢〉序曲

ウィーンの森もブローローニュの森も、ヨーロッパの人々にとってはごく身近な自然である。しかし同時に、森は人知の及ばない神秘に包まれた場所でもある。森で迷う物語は数多くのメルヘンを生み出してきた。シェイクスピアの妖精たちが飛び回る夏至の夜も、森は不思議なできごとのトポスとなる。〈真夏の夜の夢〉序曲が木管楽器の和音で始めると、たちまち魔法の扉が開く。

フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）の付随音楽〈真夏の夜の夢〉は、1843年、メンデルスゾーンが34歳の年にプロイセンの国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世の依頼で作曲された。この年、国王はポツダムに新しい劇場を建て、柿落^{こけら}としとしてシェイクスピア劇を上演することになり、かねてからベルリンに呼び寄せていたメンデルスゾーンに白羽の矢を立てたのである。

しかし、今日お聴きいただく序曲はすでに17歳の時に作曲されていた。裕福な家庭で教養を身につけて育った彼は外国文学にも造詣が深く、中でもシェイクスピアはメンデルスゾーン一家のお気に入りだったという。妖精の舞う幻想的な『真夏の夜の夢』は感受性豊かな少年の心を躍らせ、彼の想いはストーリーとともに大きく飛翔した。約1か月で作曲された序曲は彼のファンタジーの軌跡。まさにモーツァルトと並ぶ早熟の天才だ。

序奏とコーダをもつソナタ形式である。森の空気を伝える冒頭の木管楽器の和音は展開部の終わりとコーダで再現される。ヴァイオリンとヴィオラがホ短調の繊細な第1主題を提示。絶え間なく動く弦楽器の走句は、さながら飛び回っている妖精パックだ。やわらかな下行音型による第2主題は恋人たちの様子を描き、続いて金管楽器が低音でリズムを刻む上で、ベルガマスク舞曲が始まる。第1主題を中心とした展開部ののち、再現部とコーダで結ばれる。

〈白石美雪 音楽評論〉

作曲：1826年／初演：1827年2月20日、シュテットティン（ポーランド）／演奏時間：約12分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、チューバ、ティンパニ、弦五部

細川俊夫 月夜の蓮 —モーツァルトへのオマージュ—

2006年、モーツァルト生誕250年を記念して、北ドイツ放送は世界の4人の作曲家に新作を委嘱した。条件は作曲家ごとに異なるカテゴリーを指定し、カップリングするモーツァルトの曲を選ばせ、それと同じ楽器編成で新作を書くこと。細川俊夫（1955～）はピアノ協奏曲第23番イ長調を選んだ。

この作品では花がテーマになっている。1998年に弦楽四重奏のための〈沈黙の花〉を書いてから、細川は花という主題をゆっくりと具体化していく。「私の祖父は、いけばなの師匠であったこと。私の愛する日本の伝統演劇『能楽』の創始者世阿弥にとって、最高の演技者は『花』ととらえられていたこと。日本の伝統詩歌にとって、『花』は最も重要なテーマであったこと。そうしたことが、私を『花』への関心に向かわせた」と述べている。

蓮の花は水面より上に開花することから、オーケストラによる水平の水面が音楽の前提となる。「静かな明るい月夜、蓮の花は蕾^{つぼみ}のまま、月光を受けて、開花に向かって、夢にまどろむ。その夢の中には、かすかにモーツァルトの音楽への憧れ（西洋音楽への憧れ）が託される」（細川）。曲頭でピアノは一つの音が落とす影のような和音を、少しずつ変容させながら静かに重ねていく。モーツァルトの緩徐楽章をほのめかす嬰^{えい}へ音を弦合奏がドローン（保続音）として奏で、しだいに音の密度が高くなる。ピアノの装飾的な楽想が続き、激しく水面が揺らぐ。2台の大太鼓が楔^{くさび}のように打つ反復音やトレモロがドラマティックなうねりを作りだす。ピアノが力強く分散和音を繰り返す部分で、蓮の花が少しずつ頭をもたげる。ピアノのカデンツァが清浄な静けさをまといながら、開花にいたる蓮の象徴する情念を表現したのち、再びオーケストラとの交感が行われる。終盤、ミステリアスな響きの中でモーツァルトのフレーズが引用され、幻影のように響く。

〈白石美雪 音楽評論〉

作曲：2006年／初演：2006年4月7日、ハンブルク、改訂：2017年／演奏時間：約22分
楽器編成／フルート（ピッコロ持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、打楽器（大太鼓、クロティル、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、銅鑼、風鈴、リン）、弦五部、独奏ピアノ

ツェンダー

シューマン・ファンタジー（日本初演）

ハンス・ツェンダー（1936～2019）はヴィースバーデン生まれのドイツの音楽家で、晩年に至るまで指揮者として舞台に立った。ドイツを中心とするオーケストラの音楽総監督や首席指揮者を歴任したほか、バイロイト音楽祭やザルツブルク音楽祭にも出演した経験は、ツェンダーの音楽作品を実に豊かなものにしている。作風は多岐にわたるが、特徴的なのは激しい衝突や対立、そして時間が止まったかのような静寂を同居させ、ドラマティックな構成を作り上げる点である。2012年に読響が創立50周年記念として委嘱し、シルヴァン・カンブルランの指揮で初演した〈般若心経〉もそのような傾向を示していた。

1997年の〈シューマン・ファンタジー〉は、ツェンダー自ら「作曲された解釈」と呼ぶ作品群の一つである。「作曲された解釈」とは一種の編曲なのだが、単に異なる楽器編成にするだけでなく、独自の解釈を加えて音を増減する。この系列で最も有名なツェンダーの編曲が1993年のシュベルト〈冬の旅〉。歌の旋律は原曲のままでピアノのパートをオーケストレーションし、風の吹く音、氷を踏む音など多様なノイズを加え、失恋した男の孤独感や社会からのドロップアウトによる痛烈な疎外感などを表現した。音響や作曲技法の新しさに価値を置くモダニズムの時代には既存作品の編曲はあまり好まれなかったが、1990年ごろから原曲への解釈を加えた「創造的編曲」（または「作曲された解釈」）はよく行われている。ツェンダー自身も他にハイドンやドビュッシーに基づく作品を残した。

〈シューマン・ファンタジー〉の原曲は、ピアノのための〈幻想曲 八長調〉作品17である。ツェンダーは原曲がまさにピアノの精神から生まれた音楽なので、あえてオーケストラで再解釈を行ったと述べている。典型的なピアノの音を編曲するため、古典的な楽器法からかけ離れた、新たな音色の兆しを見いだそうとした。楽譜には原曲のモットーであるドイツ・ロマン派の詩人、F・シュレーゲルの「しげみ」の一部が掲げられ、秘めやかな音の織物へと誘う。

原曲の三つの楽章がそれぞれ編曲され、第2、4曲にはシューマンが最初に考えたタイトルが付けられている。その間に「前奏曲」と二つの「間奏曲」が挿入され、その3曲は弦五部の本体と離れて配置された8人の弦楽器奏者が奏でる。「前奏曲」

や「間奏曲」でもシューマンの楽想が引用されているが、まるで消しゴムでこすったかのように痕跡はたどれない。

全5曲は続けて演奏される。**第1曲「前奏曲」**は微分音程で揺れ動くヴァイオリンの楽想と舞台裏で奏でる4本のホルンの音が持続するところへ、4回、弦楽器の和音が鳴る導入部で始まる。舞台裏のソプラノサクソフォンが加わり、上行する跳躍音型と半音階で下行する音型が音高を変えながら繰り返される。最後にサクソ奏者が舞台に登場して、**第2曲「廃墟」**となる。原曲の華麗でピアニスティックな走句をマリンバとシロフォンが奏で、管楽器と弦楽器が主題を紡いでいく。ホルンは引き続き、舞台裏で低音を響かせる。第2主題の背後で小さく鳴るハーモニイが不穏な雰囲気をもたらし、時折加わる打楽器、とくにボンゴがユーモラスな感触をもたらす。原曲どおり、終結部でベートーヴェンの歌曲〈遥かなる恋人に〉がきこえる。**第3曲「間奏曲I」**はハーモニクスや持続音が生み出す動きのない音響空間で、動的な楽想が閃く。**第4曲「凱旋門」**はエネルギッシュな行進曲風の第1主題と付点音符が特徴の第2主題が交代するロンド形式。傑作なのは終わり近くの第1主題の再現部で、グロッケンシュピール、マリンバ、カウベルなどの打楽器が加わって、実ににぎやかだ。一転して**第5曲「間奏曲II」**は静止しているかのよう。ヴィオラによるト音の保続に和音やモチーフの断片が点描的に重ねられる。**第6曲「星の夜」**は夢幻的な原曲の楽想に、時おりノイズや、ヴィブラートなしの弦楽が添えられ、そこはかとなく緊張感を与えている。

〈白石美雪 音楽評論〉

作曲：1997年／初演：1998年9月1日、ケルン／演奏時間：約43分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3（バスクラリネット持替、コントラバスクラリネット持替）、ファゴット3、ソプラノサクソフォン（アルトサクソフォン持替）、バリトンサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、マリンバ、カウベル、鐘、ボンゴ）、ハープ、弦五部、バンダ（ヴァイオリン4、ヴィオラ2、チェロ2）

バーンスタイン

〈キャンディード〉序曲

レナード・バーンスタイン（1918～90）の〈キャンディード〉は、ミュージカルともオペレッタとも呼べる作品だ。1956年にニューヨークのマーティン・ベック劇場でミュージカルとして上演されたが、短期間の上演で打ち切られてしまい、その後、たびたびの改訂を経ながらミュージカル劇場でもオペラ劇場でも上演されてきた。同時期に書かれた〈ウエスト・サイド・ストーリー〉が大ヒットして映画でも成功を収めたのに対し、なかなか理想的な上演に至らない〈キャンディード〉を、バーンスタインは「靴の中の小石」と呼んで気かけ続け、最晩年の1988年に最終的な改訂を施した。

原作はフランスの哲学者ヴォルテールが18世紀に書いた小説『カンディード』。主人公の若者キャンディードは、パングロス博士の「現実社会に起きるあらゆる出来事はみな最善である」という究極の楽天主義に感化される。しかし、クネゴンデとの身分違いの恋をとがめられて、町から追放されると、戦争や大地震、異端審問、盗賊など、理不尽な現実と直面する。世界各地を巡る奇想天外な旅の末、一度は死んだと思われたクネゴンデと再会したキャンディードは、パングロス博士の楽天主義と決別し、日々の労働に向き合いながら最善を尽くすことに人生の意味があることを悟る。

序曲は輝かしいファンファーレで開始され、スピード感あふれる曲想がくりひろげられる。勇壮な「戦いの場面」の音楽の後、キャンディードとクネゴンデの二重唱「幸せなわたしたち」にもとづく優美で叙情的な旋律が奏でられる。後半に登場する意気揚々とした主題は、クネゴンデが歌うコロラトゥーラ・ソプラノのアリア「着飾ってきらびやかに」から。これまでに登場した主題を織り込みながら、華麗な終結部へとなだれ込む。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1956年／初演：1956年12月1日、ニューヨーク（舞台上演）、57年1月26日、ニューヨーク（演奏会用序曲）／演奏時間：約5分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、中太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール、シロフォン）、ハープ、弦五部

7/13
横浜マチネー

7/15
名曲

Program Notes

7/13

横浜マチネー

7/15

名曲

Program Notes

ガーシュイン ピアノ協奏曲 ヘ調

ジョージ・ガーシュイン(1898～1937)が1924年に初演した〈ラブソディ・イン・ブルー〉はアメリカ音楽界にセンセーションを巻き起こした。この曲を聴いたニューヨーク交響楽団(現在のニューヨーク・フィル)の指揮者ウォルター・ダムロシュは、より本格的なピアノ協奏曲を書いてほしいとガーシュインに依頼した。1925年、ブロードウェイで人気の絶頂にあったガーシュインは、多忙の合間を縫ってピアノ協奏曲の作曲に取り組むことになった。

〈ラブソディ・イン・ブルー〉ではオーケストレーションをグローフェに委ねたガーシュインだが、新作ではすべてを自身の手で完成させることにこだわり、あらためて伝統的な作曲法や管弦楽法を書物から学んだ。当時、ガーシュインはストラヴィンスキーやシェーンベルク、ミヨー、オネゲルなど同時代の作曲家たちの作品についても研究を深めていたという。

ガーシュインは書物から学ぶだけではなく、他の作曲家にはまねできない実践的な学習も行った。自費でオーケストラを雇い、劇場を借りて曲を試演したのである。作曲家自身のピアノによるカーネギーホールでの初演は賛否を呼んだが、作曲家モートン・グールドは「あらゆる流行に背を向けた独創的作品」と讃えた。

第1楽章 アレグロ ティンパニによる威勢のよい開始にリズムカルな主題が続く。作曲家によれば「チャールストンのリズムがアメリカ生活の若く熱狂的な精神を表す」。

第2楽章 アダージョ～アンダンテ・コン・モート トランペットのソロに導かれる情感豊かなブルース。

第3楽章 アレグロ・アジタート 都会の喧騒^{けんそう}を思わせるエネルギッシュなフィナーレ。先行楽章の主題を再現しながら、リズムの饗宴^{きやうえん}がくりひろげられる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1925年／初演：1925年12月3日、ニューヨーク、カーネギーホール／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、ゴング、ウッドブロック、鞭、グロッケンシュピール、シロフォン)、弦五部、独奏ピアノ

バルトーク ルーマニア民俗舞曲(弦楽合奏版)

20世紀ハンガリーを代表する作曲家ベラ・バルトーク(1881～1945)は、当時のハンガリー王国の各地で民謡などの民俗音楽を採集・研究することで独自の作風を築いた。バルトークにとって民俗音楽とは2種類に分類できるものだった。ひとつは民俗調の芸術音楽、すなわち都市の民俗音楽。もうひとつは村の民俗音楽、すなわち農民音楽。バルトークが蓄音機を携えて各地で採集したのは後者である。現代では両者を厳密に区分することは困難だが、20世紀初頭、バルトークが訪れたルーマニアのトランシルヴァニア地方(当時はハンガリー王国に属していた)の農村では、鉄道もなければ満足な道すらない土地で、読み書きのできない人々が自給自足同然の暮らしを送っていたという。都市から隔絶された農村で、音楽は収穫や結婚などの労働や儀礼、そして踊りと分かちがたく結びついていた。

バルトークは1910年から12年にかけて録音したトランシルヴァニア地方の踊りの音楽を用いて、1915年にピアノ曲集〈ルーマニア民俗舞曲〉を書きあげた。その後、18年にウィーンで開催される慈善演奏会のために管弦楽用に編曲するが、同曲は最終的にこの公演のプログラムから外されてしまい、同年にブダペストのアマチュア演奏団体により初演されることになった。なお、今回はアルトゥール・ヴィルナー編曲による弦楽合奏版で演奏される。

作品は七つのごく短い舞曲からなる。**第1曲「棒踊り」**。もともとの舞曲では口マの弾くヴァイオリンに合わせて若者たちがひとりずつ踊る。**第2曲「帯踊り」**。サッシュ(装飾用の幅広の帯)を着用した踊り。**第3曲「踏み踊り」**。両手を腰に置いた男性と、両手を男性の肩に乗せた女性がステップを踏み、跳躍する。**第4曲「角笛踊り」**。愁いを帯びた旋律がゆったりと奏でられる。**第5曲「ルーマニア風ポルカ」**。3+3+2拍子を基調にした活発な舞曲。**第6曲「速い踊り」**。別々の土地の2種の踊りがつなげられている。旋回するような踊りと情熱的な踊り。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1915年(原曲)、1917年(管弦楽版)／初演：1918年2月11日、ブダペスト(管弦楽版)／演奏時間：約6分
楽器編成／弦五部

7/13

横浜マチネー

7/15

名曲

Program Notes

7/13

横浜マチネー

7/15

名曲

Program Notes

ムソルグスキー（ラヴェル編）

組曲〈展覧会の絵〉

ロシアの作曲家モデスト・ムソルグスキー（1839～81）は、若くして亡くなった友人で建築家・画家のヴィクトル・ハルトマンの回顧展に足を運び、彼の作品を題材とした組曲〈展覧会の絵〉を作曲した。原曲はピアノ独奏曲。作曲者の生前に注目されることはなかったが、後にモーリス・ラヴェル（1875～1937）が色彩的なオーケストレーションを施したことで一躍人気を高めた。

「プロムナード」5拍子と6拍子が交替し、展覧会を訪れた人が立ち止まったり歩いたりする様子を連想させる。以後、「プロムナード」は第1曲の後、第2曲の後、第4曲の後に、形を変えてくりかえし登場する。

第1曲「グノームス（こびと）」不気味なノーム（gnome. 地の精）が飛び跳ね、叫ぶ。

第2曲「古城」サクソフォンが寂しげな主題を奏で、郷愁を誘う。**第3曲「テュイルリー」**公園で無邪気に遊ぶ子供たちの様子が描かれる。

第4曲「ビドロ（牛車）」農夫の牛車が次第に近づき、やがて遠ざかる。

第5曲「殻をつけた雛鳥のバレエ」雛鳥のユーモラスなバレエ。

第6曲「サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ」ふたりのユダヤ人。弦楽器が傲慢な金持ちのサムエルを、トランペットが貧しいシュムイレを表す。

第7曲「リモージュ（市場）」買い物にきた女性たちがバベチャクチャとおしゃべりに興じる。

第8曲「カタコンブ（古代ローマの地下墓地）」金管楽器が厳かな雰囲気を生み出す。

第9曲「鶏の足の上の小屋（バーバ・ヤガー＝民話上の妖婆）」突然の強奏が緊迫感を高める。民話に登場する妖婆バーバ・ヤガー

の棲家。にわとりの足の上に時計付きの小屋が立っている。

第10曲「キエフ（キーウ）の大門」聖歌風の厳かな主題が奏でられる。時を刻むような鐘の音や「プロムナード」主題の回想を経て、輝かしいクライマックスを迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1874年（原曲）、1922年（編曲）／初演：1922年10月19日、パリ、オペラ座（編曲）／演奏時間：約35分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、バリトン、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、グロッケンシュピール、シロフォン、ラチェット、鞭、銅鑼、チャイム）、ハープ2、チェレスタ、弦五部

7/19

土曜マチネー

7/20

日曜マチネー

Program Notes

ド布林カ・タバコヴァ オルフェウスの彗星

ド布林カ・タバコヴァ(1980～)は、ブルガリアの古都プロヴディフに生まれた。1991年にロンドンに移り住み、ギルドホール音楽院を卒業後、キングス・カレッジ・ロンドンで博士号を取得。2002年にエリザベス2世女王即位50周年記念式典で合唱とオルガンのための作品が演奏されるなど、早くから注目を浴びてきた。英国を拠点に活動が続け、シェイクスピア没後400年を記念した合唱と管弦楽のための大作(2016)、BBCコンサート・オーケストラのための組曲〈地球〉(2018～20)、マンチェスター国際音楽祭で初演された独奏ヴァイオリンと弦打合奏による曲(2021)など委嘱作も多い。アンドリーセンやマヌリのマスタークラスでも学んだが、その音楽は調性的な響きが優位で、バロックやミニマル・ミュージック、民俗音楽など様々な要素が自在に入り込む。また、最近ではマンチェスターのハレ管のアーティスト・イン・レジデンス(2022～23)として、同じブルガリア出身で、楽団の副指揮者(2020～23)を務めた今回の指揮者デリヤナ・ラザロヴァとも協働している。

〈オルフェウスの彗星〉は、2017年にユーロラジオ50周年を記念してBBCと欧州放送連合(EBU)の委嘱で作曲された。作曲者は、「初めは古代ローマの詩人ウェルギリウスの『農耕詩』で読まれる蜜蜂から着想を得たが、やがて蜂は宇宙の粒子となり、オルフェウスの彗星が誕生した」と記している。楽曲は、EBUのファンファーレとして使用されるモンテヴェルディの歌劇〈オルフェオ〉の冒頭「トッカータ」の音型に基づくモティーフがホルンと低弦楽器で反復され、やがてトッカータの音型がくっきりと現れる。管楽器と弦楽器の対話は続けられ、コラル風の旋律をはさんだのち、フルートとクラリネットの高音で響く悠々とした旋律が奏でられ、音楽は反復とともに大きく高まる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：2017年／初演：2017年11月27日、ロンドン／演奏時間：約5分

楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(トムトム、サスペンデッド・シンバル、シンバル、グロックンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、ウッドブロック、テンブルブロック、銅鑼、鞭)、弦五部

モーツァルト

オーボエ協奏曲 ヘ長調 K.293 (G. オダーマット補筆版)

1777年9月、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)は、ザルツブルク宮廷に辞職届を出し、新天地を求めてマンハイム・パリ旅行に出発した。ミュンヘン、アウクスブルクなどを経て、当時ヨーロッパ随一と言われた宮廷楽団を中心に活発な音楽活動を展開していたマンハイムに到着した。宮廷のあらゆる行事で音楽が必要とされるこの地で職を得ることをモーツァルトは熱望したが、それはかなわなかった。それでも多くの音楽家と知り合い、音楽的な刺激を受け、パリ滞在の帰りにもマンハイムに立ち寄った。オーボエ協奏曲 ヘ長調は、1778年秋の再訪時に着手された。おそらく宮廷楽団のオーボエの名手フリードリヒ・ラムのために書かれたと推測されるが、オーケストレーションは50小節、オーボエ・パートは70小節まで進んだところで放棄され、未完のまま残された。

モーツァルトの未完作品については、有名な〈レクイエム〉の補筆完成版にはじまり、死の直後から様々な作品で補筆や再構成が行われてきた。本作も、近年ではアメリカのピアニストで音楽学者のロバート・D・レヴィンが第1楽章の補筆を手がけている(2004)。今回は、スイスの作曲家、オーボエ奏者のゴットハルト・オダーマットが、ソリストのベルリン・フィルの首席オーボエ奏者アルブレヒト・マイヤーの協力を得て2024年に完成させた補筆版による。第1楽章はモーツァルトの楽譜をもとに作られ、第2、3楽章はオダーマットが作曲した。それがモーツァルトの作品なのかという議論もあるが、マイヤーのオーボエにより世界中で演奏されている。**第1楽章** アレグロ、ヘ長調、4/4拍子 のびやかな第1主題と静かな第2主題によるソナタ形式。華やかで技巧的なカデンツァを経て結ばれる。

第2楽章 アダージョ・ノン・トロツポ、ニ短調、3/4拍子 哀愁を帯びた主題に細やかな装飾が施され、転調を重ね、結尾にカデンツァが置かれる。

第3楽章 ロンド：アレグロ、ヘ長調、2/4拍子 陽気なロンド主題が示され、軽やかに歌われる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1778年11月(断片)、2020～24年(補筆版)／初演：2020年7月10日、ブレーメン(補筆版第1楽章)、24年12月14日、ヴェルニゲローデ(補筆版全曲)／演奏時間：約26分
楽器編成／クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏オーボエ

7/19

土曜マチネー

7/20

日曜マチネー

Program Notes

7/19
土曜マチネー

7/20
日曜マチネー

Program Notes

リムスキー＝コルサコフ 交響組曲〈シェエラザード〉 作品35

リムスキー＝コルサコフ(1844～1908)は、管弦楽法の大家として知られるが、その手腕は編曲等においても発揮され、かつての仲間たち、ロシア国民楽派「五人組」の作品を^{よみがえ}甦らせた。ムソルグスキーの交響詩〈はげ山の一夜〉のオーケストレーションや歌劇〈ホヴァンシチナ〉の補筆を行い、ボロディンの未完の歌劇〈イーゴリ公〉はグラズノフと一緒に完成させた。

こうした作業を通じて、新たな作品のアイディアを得ることもあった。1888年に作曲された交響組曲〈シェエラザード〉は、〈イーゴリ公〉の補筆作業を手がけるなかで着想された。どちらも東洋風の異国情緒に^{あふ}溢れ、雄大さと力強さが広がり、両作品の主題の共通性を指摘する音楽学者もいる。リムスキー＝コルサコフは、『千夜一夜物語(アラビアン・ナイト)』を題材に、全体の構成を立てた。「女性に不信の念を抱くシャリアール王は、毎夜、女性と一夜を共にしては翌朝、殺害してきた。新しく妃になるシェエラザードは、千一夜の間、不思議な物語を聞かせ続け、王に残忍な考えを捨てさせた」という筋書きだ。そして、初演の際に作曲者が楽団員に説明した内容などから、それぞれ第1楽章「海とシンドバッドの船」、第2楽章「カランドール王子の物語」、第3楽章「若い王子と王女」、第4楽章「バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破、終曲」といったタイトルをもつと考えられている。

音楽は、2管編成にもかかわらず、見事なオーケストレーションで^{けんらん}絢爛豪華に鳴り響く。第1楽章のシャリアール王とシェエラザードの主題は、循環主題としてそのあとの楽章にも現れる。第1楽章と終楽章の海の描写も秀逸だ。海軍時代の経験が生かされた。

第1楽章 ラルゴ・エ・マエストーソ 荒々しい響きのシャリアール王の主題で始まり、続いて独奏ヴァイオリンが優美なシェエラザードの主題を奏でる。主部(アレグロ・ノン・トロppo)は、波打つ海の様子が描かれ、フルートによるシンドバッドの主題が現れる。海は大きくうねりをあげ、シャリアール王やシェエラザードの主題も現れる。

第2楽章 レント 冒頭の独奏ヴァイオリンのシェエラザードの主題が、新たな物

語の開始を伝える。カランドール王子の主題(アンダンティーノ)は、ファゴットで示され、様々な楽器に受け渡される。金管楽器の鋭いファンファーレ(アレグロ・モルト)で緊迫感が増すが、やがてカランドール王子の主題が戻ってきて音楽は大きく高まる。

第3楽章 アンダンティーノ・クワジ・アレグレット 若い王子と王女の夢見るようなロマンティックな音楽。主部は弦楽器が官能的な美しい旋律を歌い、中間部は小太鼓のリズムにのせてクラリネットが快活な主題を示す。作曲者によれば、後半は独奏ヴァイオリンのための楽章で、華やかな技巧が披露される。

第4楽章 アレグロ・モルト ^{にぎ}シャリアール王の主題が戻り、シェエラザードの主題が続く。賑やかな祭りの様子が描かれ、これまでの楽章の主題が回想される。第1楽章の海の情景が再現され、嵐に襲われ船は難破する。最後は、優しく語りかけるシェエラザードの主題にシャリアール王の主題が重なり、締めくくる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1888年／初演：1888年11月3日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約42分
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、銅鑼)、ハープ、弦五部

〈シェエラザード〉ソロ・ヴァイオリン

伸びやかな音色と妥協を許さぬ統率力で読響をリードする実力派。2013年読響コンサートマスター就任、17年から特別客演コンサートマスターとして活躍。ベルリン・コンツェルトハウス管第1コンサートマスター、同室内オケのリーダーも務めている。バガニーニ国際コンクール第2位など受賞多数。自ら創設した「芦屋国際音楽祭」芸術監督を務める。幅広いレパートリーを誇り、バロック・ヴァイオリンにも取り組む。ベルリン在住。

日下紗矢子
(特別客演コンサートマスター)
SAYAKO KUSAKA,
Special Guest Concertmaster



7/19
土曜マチネー

7/20
日曜マチネー

Program Notes